

# 病と健康をめぐる

## 中野重行 ニンゲン学

サイエンス（科学）は、

不特定多数の人が共通した理解ができるように普遍性や論理性、客観性、再現性を重視します。サイエンスの進歩により、快適な暮らしが実現しました。しかし、医療はサイエンスで扱いにくい感情や主観も扱います。これからの医療は、サイエンスにどのように向き

合えばよいのでしょうか。

医療でサイエンスの対象になりやすいのは医療機器や医薬品です。研究開発が進み、品質は良くなり、診断や治療の効率は向上しました。一方、患者の人生や心の動きなど再現性のないものはサイエンスの対象になり

にくいのです。人生は一回限りの芸術作品のようなも

のです。医療者の思考がサイエンスに偏りすぎると、一人一人の患者の人生がこぼれ落ちてしまいます。

私は心身医学を専門にする臨床医、臨床薬理学領域の研究者、医療の教育者として半世紀を過ごしました。

その中で、医療は「サイエンスとアートの組み合わせ」であると感じています。サイエンスの対象にはなりにくが、とても大切なものをアートと表現しておきます。

私の医療におけるサイエンスとアートの関係のイメ

盤にして、有効性と安全性の実証された医薬品や医療機器の使い方を「標準化」し、さらに、患者ごとに最適となるように「個別化」して対応するのが、医療のあるべき姿です。

図の中央を境に上下に分けると、上はサイエンスの領域であり、医療で近年重視されるようになった「根拠に基づく医療」(EBM)になります。臨床試験の成果に基づいて作成された診療指針による診療が推奨される時代です。

下の領域はアートが主体となる領域で「物語と対話による医療」(NBM)です。「患者の語る物語」を聞き、全人的(身体的、精神的、社会的)に診療する医療です。そして、病気の受け取り方や生き方が変わり、患者の語る物語が書き替わっていくことを治療として重視します。

最近の医学はサイエンスを重視する傾向ですが、患者の心の動きも同じように重要です。EBMとNBMのバランスのよい「患者中心の医療」(安心と満足のできる医療)を育てていきたいものです。

(大分大学名誉教授・元同大病院院長)

— 随時掲載 —

# 医療は科学と芸術

## 患者の「物語」と対話を



「シ」を図にしたのが、「医療の基本骨格」です。医療は①患者②医療者③医薬品と医療機器などという三つの要素から成り立ちます。この三角形を「医療の基本三角形」と私は呼んでいます。それぞれの間の重要なキーワードは、医療コミュニケーション、標準化、個別化です。

「医療コミュニケーション」は、患者と医療者の信頼関係をつくり、治療効果にも影響します。これを基